

研究発表要旨

厨川白村の文学論『苦悶の象徴』について——郁達夫との比較

王 梓 玥

本発表では、厨川白村（1880～1923）の『苦悶の象徴』（改造社、1924年）の背景にある欧米思想や文学を概観した後中国近代の小説家郁達夫（Yù Dá-fū, 1896～1945）の文芸観を比較する。本書は魯迅（1881～1936）に翻訳され、白村の文芸思想は中国の新文学の発展に大きな影響を与えている。

まず『苦悶の象徴』を中心に、厨川白村の文芸思想の形成と特徴を考察する。本書は当時最新の西洋の哲学や芸術理論を汲み取っている。H. Bergsonの『創造的進化』、G. B. Shawの「生命力」、F. W. Nietzscheの「本能」論と「超人」説、A. Schopenhauerの「意志」説、B. Russellの「社会変革」論と「衝動」説、特に S. Freudの精神分析学は強い影響を与えているが、権力に抵抗する J. Milton や P. B. Shelleyにも言及しており、とくに後者の“Julian and Maddalo”の一節を『苦悶の象徴』の epigraph にしている。

そして郁達夫の文芸観も厨川白村と似たような見解を持っている。二人とも文芸の起源は人の生命力が抑圧され、人の苦悶の反映であり、文芸創作は人間の苦悶の表現であると考えている。ともに文芸は自我の真実さを暴露し、自我を表現し、主觀に忠実であるべきと主張した。時間があれば、両者の相違点にも触れたい。

主語の非意図性と to 不定詞の目的・結果用法

関 田 誠

主節（=A）に後続する to 不定詞（=B）の解釈が「目的」・「結果」のどちらになるかについて、関田（2018）では「目的・結果パラメータ（Purpose / Result Parameter: PRP）」が提唱されている。PRPによると、組み合わせは論理的に4つあり、主語の意図が、(I)【A・B「有」】の場合は「目的」、(II)【A「有」・B「無」】と(III)【A・B「無」】の場合は「結果」となり、(IV)【A「無」・B「有」】は「解釈不能」になるという。

例えば、I went to the library to prepare for the test（塙 2017:190）を例に挙げると、A の went と B の prepare は、主語の I が意図的に行える動作であるため両方とも「有」になり、to 不定詞は「目的」と解釈される。

しかし、(IV)の反例と思われる文が存在する。Whelpton (2002:199)によると、例えば The ship was sunk to collect the insurance の B (= to collect...) は「目的」と解釈が可能だという。主語の ship がモノであり、A の行為に意図性が無

いことから、(IV)と合致する。関田(2018)で、この事実は、すでに指摘されているが、PRPの観点から明確な結論は出されていない。

そこで本発表では、(IV)に該当する英文を取り上げ、そのメカニズムを解明し、英語の教育現場の一助となることを目指す。

コロナ禍において生まれた和製英語「コロナ」の分析——新聞・雑誌記事を中心

伊藤由起子

本発表は、コロナ禍において生まれた和製英語(特に「コロナ」とつく語)を分析する。2020年1月20日の新聞に初めて登場したときは「中国武漢の新型肺炎」であった新型コロナウィルス感染症は、2月22日には「新型コロナ」となり、4月には「コロナ」と表記されるようになった。現在では1. 和製英語の「アフター・コロナ」や「ウィズ・コロナ」は新聞だけでなく、張り紙やポスター、テレビなどあらゆる場面で見聞きする。2. 日本語の「コロナ」という言葉は、the coronavirusやCOVID-19だけでなく、新型コロナウィルス感染症の症状などもさす広範囲な意味を持っている。3. ソーシャルディスタンス、クラスター、テレワークだけでなく、「Go to トラベルキャンペーン」という和製英語も広く知れ渡った。本発表ではそれらの現状を分析し、学生の書く英文への悪影響を実例を基に紹介する。

連続シンポジウム「人種・民族Ⅱ」要旨

2021年は、1964年に開催されて以来、日本において二度目のオリンピックが開催される予定である。オリンピックは、世界中から多くの人種や民族が一堂に会するときである。この記念すべきスポーツ大会が行われる年に当学会では、2019年に引き続き、「人種・民族」についてのシンポジウムが行われることとなった。この機会に「人種・民族」について改めて考えてみたい。

ユネスコを核とした国際理解教育の目的と使命の中に、「自給自足を失い、他国との協調連帯なしには存続することが不可能になっている国家という現実に立脚しつつ、世界の平和と人類の福祉を達成しようとする現代世界の根本問題に貢献しようとすること」がある。

移民問題が取り沙汰されている現在において、国際理解教育のこのような目的と使命を完遂すること以外に重要なことは、異なった文化の共存への認識である。文化的多様性の尊重を主義主張したもののがマルチ・カルチュラリズム(multiculturalism)(多文化主義)である。多様な民族や文化の共存をは

かろうとする多文化主義は、移民や難民という形で人口移動が常態化している現在では、ますます認識の必要性が高まっている。

ところが多文化主義は、アメリカをはじめとする国々で、それに賛成する者と反対する者が二手に分かれて争いあう論争の中心であり続けている。近代において、法の前に平等な市民からなるはずの国民国家は、現実には人種・階級・性・宗教・言語などの違いによる差別を構造として含まざるを得なかった。普遍的な人権概念によって、こうした差別を克服していくことが、近代化の課題だったが、国境を越える多量の人口移動が見られる現在においては、差異を認めることが必要不可欠となっている。

本シンポジウムでは「人種・民族」のテーマに取り組み、多文化主義の重要性について改めて考えてみたい。会の性質上、英米の言語や文化を基調としたものを扱うこととする。（このコンセプトは一応の目安となるものであるが、内容は自由で、「人種・民族」を彷彿させる全てを含むものとする。）有益なシンポジウムとなることを祈っている。

（「平等」や「移民」や「文化的特徴」などをキーワードに、2019年9月に東京の年次大会で行われたシンポジウム「人種・民族Ⅰ」と連携して共著企画を模索中である。2021年9月に関西支部でも「人種・民族」に関する例会が行われる。共著企画は自由参加。）
(文責：吉田 一穂)

ラフカディオ・ハーン対バジル・ホール・チェンバレン——人種の観点から 横山 孝一

日本解釈者としてどちらが信頼できるか——1883年に『古事記』の英訳を出版し、東京帝国大学で言語学を教えて名誉教授になった日本学の大家バジル・ホール・チェンバレンか。それとも、1890年に来日し、日本人小泉八雲になったラフカディオ・ハーンか。この問題は1990年の小泉八雲来日百年記念フェスティバルと2004年の没後百年——ハーン松江国際シンポジウムにおいて、平川祐弘氏と太田雄三氏の間で激しく争われた。平行線をたどったこの論争を「人種」の観点から再考してみたい。太田氏によると、ハーンは「人種主義的」で「人種の違いのため」西洋人と日本人間の相互理解を不可能と見たが、「人種」の概念が「重要性を持たなかった」チェンバレンはその反対だったという。本当だろうか。

本発表では、チェンバレンのライフワークであった『日本事物誌』やハーンの『知られぬ日本の面影』などから日本人の“人種”をめぐる箇所を比較鑑賞しながら、意図的に文脈をはずす太田氏の不誠実な引用癖を明らかにし、ハーンの汚名を晴らしたいと思う。

J. M. シングの戯曲にみられるアイルランド民族

小林 佳寿

アイルランド文芸復興運動とは 19 世紀末にアングロアイリッシュ詩人 W. B. イエイツ(W. B. Yeats, 1865-1939)が中心となり起こしたものであり、彼に見いだされた J. M. シング(J. M. Synge, 1871-1909)は劇作家および劇場マネジャーとして大いに運動に携わった。しかし上演された彼の戯曲は本国でごとごとく批判され、特に 1907 年上演の『西の国のプレイボーイ』(*The Playboy of the Western World*)は劇場内で暴動に発展した。シングはアイルランドの西部やアラン島などの島々に残る独特な言葉づかいや生活を体験し忠実に自信を持って戯曲にあらわしたが、アイルランドの観客は好意的に受け取ることはなかった。しかし一方でアイルランドを離れたヨーロッパでは概ね評価されており、現代ではアイルランドを代表する優れた戯曲であるとみなされている。

本発表では『西の国のプレイボーイ』を中心に、アングロアイリッシュ作家シングが見つめたアイルランド民族の姿とアイルランド民族自身が考える自らの姿との齟齬と葛藤を読み取り、運動の意義と成果を考察したい。

「アメリカ人」概念の行方——「分断」の時代とプアホワイト層の表象

中垣 恒太郎

マーク・トウェインの『赤毛布外遊記』(*The Innocents Abroad*, 1869) では、聖地巡礼を訪れるアメリカ人観光客一行を「部族」(a tribe) として捉えている。さらに遡り、ベンジャミン・フランクリンの「アメリカ人」像から、20 世紀への世紀転換期における新移民および「人種の坩堝」概念、ジョン・スタインベックの文明論『アメリカとアメリカ人』(1966)、トニ・モリソンによる評論『白さと想像力——アメリカ文学の黒人像』(1992) などを参照しながら「アメリカ人」概念の変遷を辿る。2000 年の国勢調査からは本人の申告により「人種」の選択肢を複数選択することが可能となり、さらに 2010 年の国勢調査では、ヒスパニック系の人口急増を受けて「この国勢調査においてヒスパニック系ということは人種を意味しません」という但し書きが加わった。

グローバル化が進む中で国家の枠組みをこえた移動がより一層活発化し、人種・民族をめぐる概念も多様化・複雑化する中で、「アメリカとアメリカ人」の行方をどのように展望することができるであろうか。中でも、「トランプ現象」が引き起こしたアメリカの「分断」において、多様性の時代の中で取り残されたプアホワイト層の表象に注目してみたい。